

主節と関係節における倒置と焦点

谷口 永里子（京都大学大学院）

本発表では、(1)~(3)のような主節と関係節の中の倒置の現象について、倒置主語が焦点を担うか、という問題を中心として検討する。(1)のタイプを「指示型倒置」、(2)のタイプを「提示型倒置」と呼ぶ。先行研究では特に提示型倒置と従属節の中の倒置主語が焦点を担うか、意見が分かれている。

- (1) Sont reçus Marie et Pierre. (Marandin, 2011)
- (2) Alors, entra un soldat. (*ibid.*)
- (3) le livre qu'a acheté Paul (*ibid.*)

(1)の指示型倒置は、談話の場に根差した前提(開放命題)が存在し、倒置主語が **identificational focus** を担う。また、限定表現 **ne...que** と **seulement**、対比表現を付加する焦点テストを行った結果、(2)のような主節の提示型倒置の倒置主語は **information focus** を担うことが明らかになった。さらに、関係節中の倒置は倒置主語が節末を占める場合は倒置主語が **information focus** を担うが、間接目的語や状況補語などが後続するときは焦点を担わない傾向がある。関係節中の倒置主語が担う焦点は、指示型倒置や主節の提示型倒置の倒置主語が担う焦点より弱いものであることを示唆する。